

菊池寛

芥川のこと



# 芥川のこと



芥川に就いて一番感心してもいいと思う点は、その芸術的精進の心である。言葉を換えて言えば、芸術上の覇気、芸術上の向上心とも言う可きものである。そう云う意味で、僕なんかよりも芥川は芸術至上主義である。芥川にとつては芸術は彼の生活の大部分を占めていると言ってもいい。彼の希望も、生活も殆ど芸術にかかっていると言つてもいい。芥川は元来負けぬ気の男で、何をやつても他人には負けたくない男で、彼が勝負ごとに一切手

を出さないのは負ける事が嫌いのためであるが、彼のこ  
う云う優越慾若くは自尊心は、彼の芸術生活に於いても、  
芥川を騙って不断の努力をさせているようだ。そう云う  
意味で、芥川は行き詰まることに苦んで、新らしい境涯  
を切り拓いて行くだろうと思うから、自分は彼の将来に  
就いては可也安心している。芸術家も芸術家的壮心がな  
くなると駄目だが、芥川などは四十になっても五十にな  
っても、こうした心持を失わないだろうと思う。

然し、芥川の壮心は彼の作品に時々悪い影響を与えな  
い事はない。芥川のある芸術的の潤いというべき

ようなものが比較的欠けているのは、彼のこうした芸術的覇気が作品の上に余りに出るためでないかと思う。しかしそれと同時に、芥川はこの永久に消磨せざる芸術的壮心のために、たえず自分自身を鞭打って、新しい展開を示して行くだろうと思う。

そう云う意味で、今の文壇に芥川ほど苦心する人は、そう沢山もないだろうと思う。僕の希望としては、芥川の芸術上の精進なり苦心なりが、ただ、芸術上ばかりに止まらないで、彼の生活全体、彼の人生に対する考え方、見方などの上にも、及んで欲しいと思っている。それが

●●芥川を芸術品として大成せしむる一つの道ではないかと思う。●●芥川の作風に就いては、世間ではいろいろのことを言っているが、自分は彼を一個のリアリストだと思う。リアリストと云う意味は、彼の人生に対する態度がリアリストだと云うことだ。作品の単なる手法の点によるではないが。

●●それから、●●芥川の才だとか、●●技巧だとかいうことがよく問題になっているようだが、しかし●●芥川の場合に於いて、才だとか技巧とか言うものは、ただ、あたま頭脳だとか、小手先だけの問題だけでなく、もっと彼の本質的の観照



や、感受性や、感覚に内在しているものだと思う。芥川●  
だけの学問があっても、芥川●のような物の見方や、描き  
方は出来ないと思う。そう言う意味で、彼の技巧だとか  
才だとか言うものは、世間の評家が考えているように、  
表面的なものでないと思う。技巧は個性なり、という言  
葉があるが、そういう意味で、芥川●の技巧は、本質的な、  
個性的な、他人がいくら学んでも、学びがたいほどのも  
のだと思う。

人としての芥川●は、いくらか、強もての方で、一般か  
ら可也近づきがたいように思われている。例えば、原稿

をたのみに来る人なども、僕などと較べると可也少ないようだ。文学青年などは近づきがたいように思っているのかも知れない。が、それは反対で、芥川●●は自分に近づいて来る人に対しては、可也親切だ。特に、自分を尊敬して近づいて来る者には、可也親切だ。それは所謂自尊心の強い人の欠点でもあり美点でもあると思うが、芥川●●は尊敬して近づいて来る者には、下らない人間に対して可也親切だ。しかし、自分の味方でない人々に対しては、何時も正面をきっている。

もう一つ感心の事は、よく落ち着いて勉強しているこ

とだ。少しも心に無駄がなく、創作なり、読書なりを。

そういう意味で、文壇第一の勉強家でないかと思う位だ。

子供が出来ないうちの芥川龍之介は、父として変でもあり、似合わなかったが、この頃ではたあいもない、いいお父うさんになっている。子供を有たないうちは人生がほんとうにわかっていないというような事を言っていた。



日本文学電子図書館

---

芥川のこと

著 者：菊池 寛

制作者：宮澤一郎

底 本：「文藝春秋」金星堂

大正11年1月10日 印刷  
大正11年1月15日 発行

日本文学電子図書館